

# 戦後日本における橋川文三の「1930年代像」

——「日本浪漫派批判序説」を素材として——

*“Images of the 1930s” by Bunzou Hashikawa in Postwar Japan*  
—— *Treating with An Introduction to Criticisms of the Japan Romantic School (“-Nihon-Roumanha-Hihan-Jyosetu-”)* ——

山之城 有 美

Yumi YAMANOJOU

(人間社会研究科 現代社会論専攻 博士課程後期)

## 要 約

本研究は1930年代前後を、近代をめぐる諸問題が凝縮して噴出し、現実に対する認識のあり方そのものが問われた時期と捉え、戦後においてもこの問いが「1930年代像」の想起を通じて反復され続けていると考える試みである。本論文では戦後日本において思想家・橋川文三（1922 - 83年）が、個人にとっての社会の見方・いわゆる現実認識をどのように投影させつつ、「1930年代像」を想起させてきたのかに注目する。橋川文三は、明治国家成立以降における個人と社会の矛盾した関係性に焦点を当てている思想家であり、人々が「実存」の拠り所を求めて日本ファシズムに積極的に回収されていった、という独自の歴史認識を形成させるに至っている。その為橋川の歴史認識からは、単純な被害者意識または加害者意識に留まらず、近代を経験したどの国のどの人々にも起こりうる普遍的な問題として日本ファシズムを認識することを可能にする考え方が捉えられる。

## [Abstract]

This study considers that actual recognitions were thoroughly realized around the 1930s by focusing on the problems of modern, and actual recognitions are realizing through recollecting of “Images of the 1930s” in postwar Japan. In this paper, I note how Bunzou Hashikawa reminds us of “Images of the 1930s” by projecting his actual recognition.

He is a thinker who has focused on contradictions between the individual and society since formation of the Meiji state. He has proposed an original historical viewpoint that people were positively influenced by Japanese fascism in their quest for “existence”. In regard to his recognition, his view made it possible to recognize Japanese fascism as a universal problem that may arise among people in every country and that is more than a simple feeling involving victims or oppressors.

## はじめに

本論文は戦後日本において思想家・橋川文三（1922 - 83年）が、個人にとっての社会の見

方・いわゆる現実認識をどのように投影させつつ、「1930年代像」を想起させてきたのかを考察する試みである。1920 - 30年代<sup>1</sup>という時期は、近代国家のシステムを通過して近代の臨界点のようなものが見据えられた時期であると述べられたり、キャンノンそれ自身を支えているパラダイムが揺らぐことで様々な知が新たに見えてくる時期にあたると論じられたりしている〔成田、吉見 2002:7〕。その為本研究では、近代をめぐる諸問題が凝縮して噴出した1930年代前後という時期を、現実に対する認識のあり方そのものが問われた時期と捉えてみる。そして戦後においてもこの1930年代前後に生まれた問いは、「1930年代像」の想起を通じて本質的に反復され続けていると考えてみる。なお本論考における「1930年代像」とは、社会状況の影響を受けて作られた現実認識が最も尖鋭化されつつ投影されたものと定義する。

本稿では『橋川文三著作集』（筑摩書房）の中でも、橋川の思想の成り立ちと「1930年代像」が明確に語られている作品として、橋川が1957 - 59年にかけて連載形式で初出した初の本格的論考「日本浪漫派批判序説 ―耽美的パトリオティズムの系譜―」<sup>2</sup>の考察を目標に据えた。橋川は、右翼的なものを断絶させつつマルクス主義や近代主義といった左翼的なものの「科学」的要素に正統性を求めようとする状況にあった戦後の日本社会において、日本ロマン派が「日本主義」および「帝国主義」そのものとして日本ファシズムを擁護したと広く認知されているが故に、批判視されていることを問題視している。なお、日本ロマン派をタブー視する戦後社会の現実を目の当たりにしていた当時の橋川は、日本ロマン派に原体験を持つ世代という立場から、戦後にも「実存的ロマンティシズム」〔橋川 2000a:13〕の精神が広汎な青年層に続いていると述べたり〔橋川 2000a:8 - 9〕、西欧近代文明を超える精神が必要であるとの示唆をしており<sup>3</sup>、これらの認識は「現代の実存の課題」〔橋川 2000a:15〕として「1930年代像」にも投影されている。

「日本浪漫派批判序説」を扱っている先行研究としてはまず、①松本健一の論文「橋川文三論 <歴史>を見つめる人」〔松本 1984〕が挙げられる。松本は、戦中派である橋川が「死」の体験の意味を病的に「歴史」に拘泥せざるを得なかったと解釈しており、橋川の内省的で受け身の姿勢を指摘している。次に、②桶谷秀昭の論考「『日本浪漫派批判序説』について」〔桶谷 1984〕において桶谷は、福本イズムと日本ロマン派の世代が同じであることや、橋川の極限のイロニイは生き延びた人間の自然な感情であることを示しつつ、「世代」の経験に着目している。また③平野敬和の論文「ロマン派体験の思想史 ―橋川文三『日本浪漫派批判序説』を手掛かりに―」〔平野 2006〕においては、橋川が示す戦後も再生産され続ける日本ロマン派の病理に注目しつつ、平野は戦時体験が戦後を拘束していると述べている。その際に平野は、橋川が竹内好の近代批判には肯定的であった一方で、丸山真男の「外在的」な日本ファシズム批判には否定的であったと述べ、各論者への橋川のスタンスを明示している。そして、④井口時男の考察「解説 超越者としての戦争」〔井口 2011〕が挙げられる。井口は、イロニイに毒される青年の一般性についての指摘や、日本のスノビズム文化論<sup>4</sup>に触りつつ、橋川が戦争経験を通じて「歴史意識」を形成し得るとしていることに着目している。これらの①～④の先行研究では、橋川が自身の世代の経験を歴史意識に投影させようとする姿勢が共通して示唆されている。但しその際には、各先行研究が着目する内容の違いによって、橋川の歴史意識が、普遍的なもの（青年一般、世代一般など）に結びついているか、特殊・異常なもの（日本のスノビズム文化論、病的に扱

られる戦中派や日本ロマン派など)に結びついているかの解釈が分かれている状況がある。

その為、(1)本研究においては橋川の論考より、近代に関わる普遍的な諸要素と特定の地域や人物に関わる特殊・異常な諸要素との整合性を解釈することに問題意識を置くこととした。そして、橋川が近代そのものの矛盾までも射程に入れた歴史意識を持っていたと考えつつ、橋川が普遍的な要素と特殊な要素をどの様に共存させていたのかを分析することとする。さらに、橋川が日本ロマン派を論じる際には、実質的に何を論点としているかに注目する形で「1930年代像」を導き出すこととする。

その上で本稿はまず、(2)戦後日本においては各論者の価値観に基づいた多様な思想潮流がせめぎ合っていた状況を念頭に、橋川が他論者とはどのように異なるスタンスを持っていたのかを比較検討する手法を採ることとする。その際には、橋川が近代そのものの矛盾に着目することで、日本近代の特殊性に基づいた丸山真男の日本ファシズム論に関しては、肯定的評価と否定的評価を共存させていたことに最も注目してみることとした。

さらに本稿では、(3)どの時代にも社会状況などの影響を受けた「知」の偏りがあることを踏まえ、その時代の特徴を抽出する手法も試みることとする。なお形式的な「進歩」や「民主主義」を問題視していた当時の橋川は、「科学」としてのマルクス主義に縛られていたアカデミズムを批判した吉本隆明<sup>5</sup>の影響も受けつつ、「転向」という切り口のみでは論じきれない日本ロマン派の考察を通じて近代そのもの持つ矛盾を浮き彫りにしている。

以上の(1)～(3)の問題意識と手法を念頭に、本研究では1930年代前後に内在した近代そのものに関わる「知」の諸問題が、戦後を生きる橋川の観点からはどう見えていたのか、ということ現在の「知」の観点から考察することで、各時代の相対的距離感が捉えられることとなる試みである。

## 1 日本のマルクス主義へのアンチ・テーゼとしての日本ロマン派—「根源的実存としての美」の死守—

橋川は、戦後日本において「特異なウルトラ・ナショナリストの文学グループ」〔橋川 2000a : 3〕と一般的には受けとめられ、タブー化されていた日本ロマン派を擁護するスタンスを持っている。橋川は、1935年から1938年まで保田与重郎や亀井勝一郎らによって出版され、多くの読者の心の拠り所となっていた昭和期の文芸同人雑誌である『日本浪漫派』について、実際の所は「『何をしたか』はあまりはっきりしない」〔橋川 2000a : 7〕と中野重治を引用する形で投げかけながら、「箸にも棒にもかからぬ例外的神がかりとして、むしろ個々人の精神病理の問題として解消することは不可であり、事実にも論理にも合致しない」〔橋川 2000a : 14〕と述べ、異常視することを批判している。

なお橋川が評価している中野重治は論考「第二『文学界』・『日本浪漫派』などについて」〔中野 1952a=1978〕において、『文学界』や『日本浪漫派』などの運動が「…帝国主義的日本の侵略戦争手伝いにすべりこんで行つたことは知れわたつている…」〔中野 1952a=1978 : 242〕ものの、「私の言葉でいえば、『…当時の日本文学の社会的・歴史的事情』が明らかにされていない…」〔中野 1952a=1978 : 244〕と述べているが、この中野の考え方に依拠する形で橋川は日本

ロマン派を批判視する戦後の社会状況に一石を投じる覚悟を持ったものと考えられる。また中野は、戦後の「民主主義」を実質的に機能させる為にも〔中野 1952a=1978：247〕、「…民族の問題をモメントとして取り出したことに一つの積極性を持ちながら、それを排外主義、民族主義、侵略的帝国主義の方へ持つて行つてしまつた『日本浪漫派』の運動などを、こんにちの日本の問題、これからの日本の針路決定に関係あることとしてふりかえることが必要になつてくる。」〔中野 1952a=1978：243 - 244〕と論じている。加えて中野は、日本近代の特殊性が労働者を虐げてきたと理解する側面と、民族やプロレタリアートの問題が資本主義や帝国主義へのアンチテーゼを投げかけていると解釈する観点を併せ持つており、近代に内在する矛盾を意識した歴史観を橋川が持つきっかけを与えたとも考えられる。その際に中野は、「われわれの尊敬する先輩たちは、日本人民の生活の実質的近代化のために払われたさまざまな努力と犠牲とを、プロレタリアートの歴史的課題にむすびつけることに十分には成功しなかつた。」〔中野 1952a=1978：252〕とし、「…『近代主義』のアンチ・テーゼが、『日本浪漫派』的・復古的民族主義として出てきた…」〔中野 1952a=1978：253〕と捉えている。以上の特徴の中でも改めて注目したいのは、中野が『文学界』や『日本浪漫派』などの問題を「結果からだけ判断するとすればそれは誤りになる…」〔中野 1952a=1978：242〕と主張していることと、橋川が「…中野が『何をしたか』』といっている意味は、…政治的な外面的行動に限られない筈である…」〔橋川 2000a：8〕と述べていることが、共にいわゆる政治的な結果責任のレベルには価値付けをせず、日本ロマン派に内在する問題に向き合おうとしている点である。

さらに橋川は、日本ロマン派の発生根拠を考察する人物として竹内好<sup>6</sup>や中野重治などを評価する一方で、平野謙<sup>7</sup>などについては「…日本ロマン派を少なくとも体験としてとらなかつた人間」〔橋川 2000a：6〕としている。そして、橋川は自身の精神の基本的構造を決定したものとして、マルキシズムの方法と日本ロマン派への問題関心を持つことを語っており、日本ロマン派が日本帝国主義イデオロギーの構造的秘密と精神的体験の究明の手がかりになると論じている。

次に橋川は世代間の違い<sup>8</sup>に注目しつつ、「昭和十年代の解体的体験」〔橋川 2000a：10〕を表明し、思想史的状況が「実存」の問題に関わる形で決定的に変質したと述べている。その際に橋川は、この時期<sup>9</sup>を「…日本ファシズムの成熟期といわれるものであり、逆に見れば、それ以前における中間層インテリゲンチヤの人間の統合シンボルであつた共産主義が喪われ、『不安』『頹廢』『転向』『喪失』が普遍的などすぐろさで人間性を蝕み始めた時期…」〔橋川 2000a：10 - 11〕と論じ、「…喪われた青春を多かれ少なかれ閉鎖的なエゴの中で守ろうとした…」〔橋川 2000a：11〕としている。なお橋川はこの時期の小林秀雄が、文壇に「思想」が輸入されてから文学界が混乱する様になったことを指摘したり、「『…ありのままの日本の現実を信じる』人が出なくちゃだめだ…」と語っていることを挙げ、あらゆる理性的判断の無意味と無効性を説く「反知性主義」の浸透が起こつたことを述べている〔橋川 2000a：11 - 12〕。そして橋川は保田を引用する形で、日本ロマン派の起源は日本の状態を改革しようとするマルクス主義が本質的に変化した精神史上の事件としての満州事変にあることを表現し、政治的なものや事実の重視ではなく「満州国」という新たな文明の理想や世界観の重視へと価値付けが変容したことが日本ロマン派の起源であることを示している〔橋川 2000a：22〕。橋川は、なぜこの変容が起きたかにつ

いても保田を引用しつつ、現実社会の危機的状況に絶望した青年達が生き抜く為に生まれた変容であったことを示し、加えて、1930年代前半頃の挫折・失意・頹廢の状況が、戦争、敗戦、戦後の時期を通じた昭和の青春像の原型を打ち出したと論じている<sup>10</sup>〔橋川 2000a: 23 - 24〕。以上より橋川は、明治以降に「社会科学」として輸入されたはずのマルクス主義が実質的には「人間的統合シンボル」として定着せず、それ故、人々は理想像を含んだ反「科学」的な「実存」を求める様になったと捉えていることが分かる。このことは橋川が日本ロマン派について、「観念」上の「左翼」であったものが「観念」上の「右翼」に変容したものであると論理的に擁護することで、本質的には「日本主義」でも「国家主義」でもないことを示そうとしているものと解釈出来る。

その為橋川は日本ロマン派について、マルクス主義の革命思想に起因しているものの現実的な政治認識を失わざるを得なかったと捉えている〔橋川 2000a: 26 - 27〕。またその際に橋川が日本ロマン派について、「…その組織論が『日本美論』であり、その戦略が『反文明開化官僚主義』であったといえれば私のいう意味も明白であろう。」〔橋川 2000a: 26 - 27〕と示していることに注目すると、危機的な社会状況下では日本ロマン派は、「実存」に関わる「日本美論」<sup>11</sup>という基盤的な視座の方を、明治国家成立以降の反「官僚」という戦略的な視座よりも優先させざるを得なかった為に、結果として日本ロマン派は現実的な政治認識を失わざるを得なかったと解釈出来る。なおその際橋川は、日本ロマン派が克服しようとしたものが「反帝国主義」や「大衆的疎外現象」〔橋川 2000a: 26〕であるとしている。さらに橋川は日本ファシズムについて、人間の「実存」や危機感に関わるエスノセントリックな原始感情を母胎としたパトリオティズムに基づくものであると述べている〔橋川 2000a: 76〕。これに関して橋川は、明治維新以降に再び国学的「自然」の観念が究極の根拠〔橋川 2000a: 86〕となり、「美意識」のみが戦争を耐え忍ぶことを可能とする為、日本の現実と歴史を成立させるのは根源的「実在」としての「美」となることで、政治に対する美の原理的優越が生まれ、「政治」の介入する余地はなかったと論じている〔橋川 2000a: 88〕。

次に、橋川が本論考において近代そのものの矛盾を、特に保田を論じることで浮き彫りにしていることに注目してみる。橋川は、保田そのものへの心酔はプロレタリア文学・近代文学の「転向」論理と直接符合するのではなく、日本ロマン派における保田そのものの「転向」として分析されるべきであり、保田の「生粋の」日本主義イデオロギー、非政治主義、反封建運動性といった要素に注目しつつ、プロレタリア文学史の再検討を行うべきであると述べている。その際に橋川は、竹内好が保田について語った内容を引用し、「『…保田が大阪高校在学中、パリパリのアジ・プロ小説を書いて懲戒をくらった…』」〔橋川 2000a: 20〕ということや、「『(保田が) 天皇を言い出したのは後の段階なんです。最初考えていたのは、神というと大袈裟になるんだがね、なにかそういう絶対的なものを追及していた…。』」〔橋川 2000a: 20〕と述べている。これらのことより橋川は、保田を通じて日本ロマン派の「転向」を特殊・異常なものでなく、普遍的な問題として捉えようとしていると解釈出来る。さらに橋川は、保田の特徴がまともに分析されていないのは、現代の「進歩主義」の根深い弱点の為であるとしている。また橋川が、「…保田がドイツの勝利を希望したことはいうまでもないとしても、ナチスに対しては殆ど終始批判的であったこと、また我国の暗黒時代の横行した『日本主義者』『東亜共同体論者』『世界史の哲学論者』

等々に対して、もっとも根本的ないみで批判的であった…」〔橋川 2000a: 27〕と述べていることから、橋川は保田を「特異なウルトラ・ナショナリスト」ではなく近代文明批判という普遍的な意味合いをもつ人物として捉えているものと思われる。なお橋川は、保田については「…(戦後の)現在においてもその思想的・批評的立場を少しも変えていない」として評価する一方で、亀井勝一郎が戦後に日本ロマン派を「…要するに一種の熱っばい若気の所業…」であったと批評していることについては「…したたかな小市民的エゴイズムと『教養主義』の匂いを強烈に放つもの…」として批判している〔橋川 2000a: 41〕。

最後に橋川が丸山真男をどのようなスタンスで位置付けているかについて考察する。橋川は日本ロマン派について、権力衝動が欠けるゆえ「無法者」でなく、合理的・市民的行動様式にも不適格であったゆえ「官僚型」でもなかったと述べ、日本ファシズムを考察する上で「純粋ファシスト」としての「青年将校」を仮設する丸山真男<sup>12</sup>とは異なる説明が必要であるとしている〔橋川 2000a: 9〕。その際に橋川は、「私は、軍隊にひっぱられた保田与重郎が、その高名なる国粹主義への貢献と皇軍賛美の努力にもかかわらず、ひどく不器用にいためつけられたというエピソードを思い浮べる。」〔橋川 2000a: 10〕と述べ、さらに、「いわゆる右翼・ファシスト的観念論に嫌悪を感じていた若い世代が、保田の国粹的神秘主義にはかなり容易にいかれたということ、この点の解明が大切であろうと思う。」〔橋川 2000a: 14 - 15〕と実体験を基に論じている。なお橋川は日本ロマン派がドイツ・ロマン派と差異があることを指摘する際には、カール・シュミットの「友=敵関係」の政治理念と異なるものとして、丸山真男の「天壤無窮」の概念を肯定的なスタンスで引用している〔橋川 2000a: 87〕。以上より橋川は、丸山が特殊・異常なものとして日本ロマン派や日本ファシズムを描いていると判断した場合には丸山に批判的である一方で、近代そのものの矛盾が各地域の歴史的土壌によって異なってくるものであることを示す際には丸山の「天壤無窮」の概念を肯定的に引用していると解釈出来る<sup>13</sup>。但し橋川は普遍性を重視し、丸山は西洋近代の考え方を導入しているものの、よく見てみると共に日本の特殊性を前提とする姿勢を乗り越え切れていないという特徴がある。これは戦後日本において、マルクス主義が実際の所は「社会科学」として受け入れられてこなかったことが影響しているものと考えられる。

## 2 ロマン的イロニイからの反「官僚」—政治的リアリズムへのアンチテーゼ—

橋川は、保田が「尖鋭な近代に通じ、さらにその頹廢の必要を了解…」〔橋川 2000a: 31〕しつつ、自らを復古保守かつラジカルな近代主義者と呼んでいる側面にも注目し、このロマン的イロニイによる「近代批判」は文明開化の系統的批判としてそのまま成立すると論じている〔橋川 2000a: 30〕。そして橋川は、「世のいわゆる『近代主義者』『我々インテリゲンチヤ』の『近代』は『封建』を内蔵した虚偽の近代であり、開明官僚的人工人為の近代のカリカチュアにすぎないとし、復古保守を説く保田らこそが、最も斬新な近代主義者であるといっているわけだ。」と述べており、さらに、保田が「大正官僚気質」や「官僚風の街学生」も関わっている「唯物論研究会」を「…非文化と野蛮と封建的残存…」として批判していたことを示している〔橋川 2000a: 30〕。これらのことより、橋川が前章においても語っていた日本ロマン派の手段にあたる

反「官僚」とは、官僚制度の実体についてではなく、ロマン的イロニイの視座から「近代批判」を提起している意味合いがある。その際に橋川は保田を引用しつつ、「官僚」的なものは日本型のマルクス主義が生み出したとし、観念的なレベルで左翼批判をしている特徴がある。

そして橋川は、「無限否定」〔橋川 2000a: 42〕のイロニイによって「リアリズムの主体的立場」〔橋川 2000a: 40〕を持っていた保田こそが、近代思想のラジカルな体現者として日本ロマン派の核心であると述べてもいるが、このことは橋川が、日本ロマン派を政治的リアリズムのアンチテーゼとして捉えている為と解釈出来る。その際に橋川は、日本の伝統的な私小説を低俗なリアリズムと位置付けたり、日本のマルクス主義及び唯物論を卑俗な経験主義として批判したり、さらには、「…日本ロマン派の文明批判は、あたかも我国の『強権』が、まさにファシズムとして自己を悪無限的に再編せねばならなかったことに対応するように、『無限の自己否定』の志向としてのみ自己を主張するという悲劇に終わった…。」〔橋川 2000a: 44〕と述べている。このことより橋川には、「実存」を守れなかった明治以降の私小説やマルクス主義や「強権」を批判するという歴史意識が読み取れる。

なお橋川は、1959年7月に初出された論考「昭和十年代の思想」<sup>14</sup>〔橋川 1959=2001a〕においては、「昭和初年らしい『不安』にはじまり『転向』『ロマンティズム』『行動主義』『歴史哲学』等々を遍歴した日本の知性が、終局において見出した歴史的自覚の形態がこの（近代の）『超克』の理論にほかならなかった。」〔橋川 1959=2001a: 82〕と論じている。そして、個の存在と結びついた現実感のある歴史意識を生まなかった日本型のマルクス主義が広がっていた社会状況だったところに、1930年代後半以降は、「日本主義」や「古典」の復興と共に農本主義・民族主義の内面の展開や、マルクス社会をふまえた「市民社会」理論の内部からの独自の発展が生まれましたが、その後は戦争によって個体の意識が非歴史主義へ収斂したと述べている。以上のことから橋川の反「官僚」とは、明治期以降に「実存」と結びつく形での歴史意識が生まれなかったことを批判する視座を持つものであると解釈出来る。

次に橋川が、マルクス主義をくぐった日本ロマン派は「…国家の構造機能の実質が何であるか…」を知っていたと述べつつ、「天皇制」についてもイロニイの側面から批判的に検討すべく「イロニイとしての天皇制」〔橋川 2000a: 47〕を提示していることに注目してみる。橋川はこの際に、日本ロマン派とは古典的ロマン主義を脱すべく再構成されたものであるという意味付けをする語り<sup>15</sup>や、日本ロマン派は政治的風土を失った状況での自己批判の意味合いを持つと述べつつ、「転向」という普遍的な鍵概念に注目してドイツ・ロマン派との差異を比較する形<sup>16</sup>で、日本ロマン派に与えられた全的体系としては天皇制以外になかったという語りを作っている。そこで、このロマン的イロニイについて橋川が、日本ロマン派とドイツ・ロマン派の共通点と差異を見出していることに注目してみる。まず橋川は、イロニイの概念とはドイツ・ロマン派の特異な自己批判形式＝創作理論から展開したものであるとし、「…ある種の政治的無能力状態におかれた中間層的知識層が多少ともに獲得する資質に属するものであって、現実的には道徳的無責任と政治的逃避の心情を匂わせるものであった。」〔橋川 2000a: 33〕としている。なお橋川がイロニイを規定する際には、カール・シュミットの「『…イロニイの中には、あらゆる無限定の可能性を留保しようとする衝動がある』」〔橋川 2000a: 34〕を基に捉えている。そしてこのことを基にして橋川は、①現実的限界のリアリズムをさけて自我の可能性を上へ追い上げようとする

衝動や、②世代の問題を通じて常にあらわれる人生上の問題でもある、時代の危機感に敏感な青年たちの必然的歩み、といった語りをドイツ・ロマン派と日本ロマン派に共通するものとしている。但し橋川は、③『『私たちは死なねばならぬ!』』〔橋川 2000a: 36〕という日本ロマン派と、『『我々は闘わねばならぬ!』』〔橋川 2000a: 35 - 36〕というナチズム—ドイツ・ロマン派の影響があるとされる—との比較については差異を語っている。以上より、日本ロマン派とドイツ・ロマン派の関係について共通点と差異を両方見出すという橋川の観点は、近代そのものに内在する各地域共通の問題が、各地域の歴史的土壌の下で差異化して現われているという考え方を持つものと解釈出来る。

特に橋川は日本ロマン派について、国学的な絶対的現状容認で政治的リアリズムを排斥し、破滅的イロニイによる敗戦と大崩壊の肯定的追及をしたものと捉えていることから、「…殆ど革命を想像したくさえないのである。」と語ったり<sup>17</sup>、保田のあらゆる情勢分析の拒否や科学的思考の絶滅も指摘している〔橋川 2000a: 35〕。その為橋川には、「社会科学」として受け入れられていたマルクス主義の革新的要素が反「科学」的な「日本主義」に取り込まれていった状況を論じているという特徴がある。

最後に橋川が保田のイロニイ<sup>18</sup>についても、特殊・異常ではなく普遍的なものとして扱っていることを述べる。橋川は、プロレタリア・リアリズムや唯物論の代替として、イロニイと国学的主情主義との頹廢的結合があったことを述べつつ、保田が己の存在を何ものも敵と感じえないほどにイロニカルな弱者であると決定したことで、敵の存在を認めない「侵略主義」<sup>19</sup>を生んだとしている。その上で橋川は、保田が粗暴な右翼ゴロツキ的な性情や、洗練された新官僚的ファシストではないと述べている〔橋川 2000a: 50 - 51〕が、これは前章で橋川が丸山との差異を出した場合の理由づけと同じであると考えられ、日本ロマン派が右翼に象徴される単純な「日本主義」でも、官僚に象徴される「国家主義」でもない独自のスタンスを持っていることを示そうとしているものと解釈出来る。

### 3 無政府主義を帯びる日本ロマン派 —国体に直結した農本主義との比較—

橋川は、保田が本居宣長の国学の影響によって非政治的で無政府主義を帯びる「国学的農本主義」<sup>20</sup>者とも称せられていることに注目しつつ〔橋川 2000a: 72〕、日本ロマン派を「伝統的農本主義」<sup>21</sup>と関わりが深い「郷土主義」の視座から捉えている〔橋川 2000a: 58〕。その際には「政治を拒否して美的感覺的なイロニーの世界で『孤高の反抗』」を行おうとする「日本浪漫主義」と、「官僚機構の命令政治に反対して非政治的な自主的共同体をつくろうとする運動」である「農本主義」とは、対応関係にあるとする藤田省三<sup>22</sup>の引用をしている〔橋川 2000a: 58 - 59〕。さらに橋川は、日本ロマン派の「具体的状況の直接的感覺的体験」への復帰と、農本的郷土主義における「具体的生活」への回復とが、「生の哲学」の日本的表現としてパラレルであるとする藤田の引用もしている〔橋川 2000a: 59〕。以上より藤田を引用しつつ橋川は、「生の哲学」を守る為に反「政治」を唱えた「日本浪漫主義」とパラレルなものとして、「生の哲学」を守る為に反「官僚機構の命令政治」を唱えた「農本主義」を捉えているものと考えられる。なおその際に橋川は、反「国家主義」に繋がる反「官僚」という概念について、「制度」のレベルと

「観念」のレベルをそもそも分けていないという特徴がある。

さらに橋川は農本主義と日本ロマン派の共通点として、①日本の土着思想に根ざした文明批判、②明治以降の新国家形成の原理の批判、を挙げているが〔橋川 2000a : 63〕、この際には橋川は、①が「実存」に関わる形での「観念」のレベルの方から、②が「制度」のレベルの方から捉えているものと解釈出来、2つのレベルを混在して論じているという特徴がある。なお①に関して橋川は、日本ロマン派の方が保田の唱える「日本美論」を通じて文明批判を行っているのに対し、農本主義の方は「社稷<sup>しよく</sup>体統」<sup>23</sup>の理念から文明批判や国家主義批判を行っていることを示している。また②については、日本ロマン派が「大正官僚式」の「アカデミズム」<sup>24</sup>を批判しているのに対して、農本主義は「官僚政治」や「ユートピアな国家」<sup>25</sup>を批判していると述べている。〔橋川 2000a : 63〕。

次に日本ロマン派と農本主義の違いを述べる。橋川は日本ロマン派と農本主義には、「政治」や「制度」の解釈、「自然」や「神」の理念に関して相違<sup>26</sup>があるとも論じている。特に橋川は、日本ロマン派については保田が「封建の制度」や「富国強兵政策」などの「制度」的支配に基づかない「神道」の正当性を主張しつつ無政府主義を唱えていたとする一方、農本主義については国体に直結する家族制度を唱えていたことを示している〔橋川 2000a : 64 - 65〕。このことより橋川は「制度」のレベルに重きを置きつつ、日本ロマン派の本質が反「国家主義」であったのに対して、農本主義は「国家主義」と直結していたことを指摘していると解釈出来る。その際に橋川は、政治への屈服が儒教的理念や近代主権理論への妥協から生まれることを指摘している保田について論じている〔橋川 2000a : 66〕。特に橋川は宣長学の儒教的な理念に関しては、超越的な神々の「実存」を「世界過程の実現」として捉えるが故に〔橋川 2000a : 68〕、人間の「主情」の肯定と否定という逆説的な結びつきが生まれたことを指摘している〔橋川 2000a : 67〕。

最後に橋川が以上の流れを受けて、日本ロマン派とドイツ・ロマン派の共通点を万有在神論<sup>パネンタイスムス</sup>という普遍的な視座で捉えていることについて述べる。橋川が「かつてカール・シュミットは、ロマン主義的保守思想の特質について、それが汎神論というよりも、万有在神論<sup>パネンタイスムス</sup>の傾向をおびることを述べたが（『政治的ロマン主義』）、宣長における神と自然、神と人間に関する思想は、『神の作為による自然』（丸山真男）という理論構成をとることによって同じくパネンタイステイックな機会主義の傾向を示したといえよう。」〔橋川 2000a : 69〕と論じていることより、橋川は日本の万有在神論的な傾向を補強する丸山の概念に関しては、普遍的な視座に通じるものとして肯定的に引用するスタンスを取っているものと解釈出来る。但し、丸山の普遍的なものに通じる視座については肯定的に引用する橋川も、日本の特殊性に基づくイデオロギーに翻弄されながら論じているという特徴がある。

なお橋川は、農本主義に「自我」が侵食されたという考察を、前章でも挙げた論考「昭和十年代の思想」〔橋川 1959 = 2001a〕でも行っている。その際には、マルクスの実践と主体的決断を解消する国学の論理が融合および再構成される形で「ロマン的自我」が生まれたという語りになっており、日本マルクス主義の「自我」への食い込みが弱かった為に共同体的で複数の有機体による「自我」が追求される形での「転向」が起こったという描き方がされている。その際には、「(革命を否定するものである) 家族」問題に基因する転向の多さを指摘する語りや、生活上の責任を負う「存在的事実」としての家族共同体で成り立つ農本主義についての語りがされてい

るのであるが、これは日本ロマン派とパラレルにある「(家父長制的) 農本主義」というモチーフと関連するものであると考えられる。

## おわりに

橋川は「日本浪曼派批判序説」を初出した1957 - 59年という戦後の時期を、近代啓蒙主義が主流の社会状況ゆえ未だに形式的な民主主義しか成立していない時期として危惧しており、真の主体性を形成させる為の糸口は戦中から戦後にかけて一貫した態度を貫いている保田与重郎にあるという問題意識を持っていたことが分かった。橋川にとって保田とは、戦中の橋川が心酔した日本ロマン派そのものであり、戦中の橋川の「実存」を守った唯一のものであった。よって橋川はこの原体験に基づき、戦後に日本ロマン派を突然タブー化してしまった状況主義こそが欺瞞であり、戦後の近代主義やマルクス主義の唐突の台頭こそが人々の戦中から戦後への心情の継続的な統一感を削ぐ要因になったとみてしていると解釈出来る。つまり橋川は、戦中から戦後にかけて変わらない一貫した思想を持ち続ける保田を評価し、保田の思想を象徴する日本ロマン派と向き合うことで、橋川自身の戦争体験をも肯定的に受容しようとしたものと考えられる。このことは橋川が、日本ロマン派の経験を生きた保田を評価する一方で、戦後に自らの日本ロマン派の経験について否定的であった亀井勝一郎については批判的であったことから分かる。よって、橋川が日本ロマン派を論じる際には実質的には日本ロマン派を象徴する人物として保田与重郎が論点とされていることに注目する形で、橋川の「1930年代像」の核をまず検討してみることにする。橋川は保田について、①日本マルクス主義に基づいている、②半封建制を含んだ形のラジカルな近代批判をした、③非政治的なイロニイ的弱者、④政治への屈服を批判し無政府主義を唱えた、などの語りをしていることから、保田が「右翼的ゴロツキ」でも「新官僚的ファシスト」でもない政治的アンチテーゼという変革主体を持った人物であることを示している。よってこれらのことより、橋川は保田を一貫した主体性を持ち続けた人物として評価していると解釈出来る。戦中から戦後において変革主体を保っていた保田の思想こそが正当な評価を受けるに値するものであり、戦後に主流となった近代主義的な潮流を状況主義的なものとして批判していることが分かる。

加えて本研究においては橋川文三が、戦後社会から受ける影響を現実認識に反映させつつ、「実存」を守る為の反「官僚」という原体験に基づいたモチーフから自己投影する形で「1930年代像」を広く論じていたことについても考察してみる。まず橋川の「実存」というモチーフに関することから、橋川が近代の普遍的要素と特殊・異常な要素の整合性をどの様に持たせていたかという本研究の問題意識への導きの糸が示されていることが分かった。橋川はドイツの「実存主義」・「ロマン主義」・「転向」などと類似するものが日本にも存在していたことを示唆していることから、橋川が普遍的な視座から近代そのものの矛盾を捉えようとしていたと解釈出来る。また橋川が世代間や家族関係といった普遍的なテーマを見据え、「1930年代」における人々の混乱する心情をパトリオティズムに連なる視座で捉えていることも分かった。これらのことより橋川は、近代そのものの矛盾が各地域の歴史的土壌によって異なって現れることを提示しており、特殊・異常なものとして特定の地域や人物の状況を描くことには否定的だったと解釈出来る。橋川

は、近代に端を発した個人と社会の矛盾そのものに原因をみる為、単純な被害者意識または加害者意識に留まらず、近代を経験したどの国・どの人々にも起こりうる普遍的な問題として認識することを可能にしているものと考えられる。さらに、橋川の反「官僚」というモチーフに関しては、「実存」を失わせる近代文明および近代合理性といったビジョンが含まれつつ、「国家主義」的なものを批判する歴史意識から導かれているものと解釈出来る。但し橋川は反「官僚」の意味合いについては、実体としての官僚制度についてではなく、日本ロマン派が日本主義および日本ファシズムに取り込まれることを許した日本マルクス主義への批判を念頭に置いているという特徴がある。なお橋川は、「生の哲学」を守る為の反「官僚」という共通点を持つ日本ロマン派と農本主義について考察する際にも「観念」のレベルに「制度」のレベルを含む形で語っているが、日本ロマン派と農本主義の違いの考察に関しては「制度」的支配の問題に言及しつつ日本ロマン派は反「国家主義」であったことを強調する論じ方になっている。

次に、本研究では橋川が中野重治や竹内好などに全面的に依拠しつつ日本ロマン派に内在するものを検討していたことが分かったが、特に橋川の丸山真男および藤田省三とのスタンスの差異に注目して考察してみることとする。橋川は丸山を語る際に、近代そのものの矛盾が各地域の歴史的土壌によって異なって現れることを丸山が示していると判断した際には肯定し、特殊・異常なものとして特定の地域や人物の状況を描いていると丸山を判断した際には否定的であり、肯定的評価と否定的評価を共存させていた。その上で注目してみたいのは、パーソナルな心情の成り立ちを重視しつつ近代そのものの矛盾を見ようとする橋川と、西欧の責任主体をモデルとするゆえに日本の特殊性を強調する丸山<sup>27</sup>とのスタンスの比較から、橋川と丸山の差異が戦争責任や日本ファシズムの解釈<sup>28</sup>を通じた歴史認識の違いにまで影響していることである。「無責任体系」や「上からのファシズム」の概念を唱えた丸山は、戦争体験の感情を日本ファシズムを通じた歴史認識に積極的には投影させてない立場であった。一方で橋川の特徴としては、明治国家成立以降に生まれた個人と国家の矛盾した関係に注目することで、矛盾を含んだ「実存」が極限状態において現実的な政治感覚を失いつつ拠り所を求めて国家に積極的に回収されるという形で日本ファシズムを解釈していることが挙げられるが、これは橋川が戦争責任や歴史認識までも自己投影する姿勢で捉えている為であると考えられ、日本ファシズムを近代そのものの普遍的な問題としてみようとしていたものと解釈出来る。その際に橋川は丸山を批判しつつ、日本ロマン派が「右翼」に象徴される「日本主義」でも、「官僚」に象徴される「国家主義」でもない独自のスタンスを持っていることを示そうとしている特徴がある。なお橋川は藤田省三についても、藤田が指摘する日本ロマン派と農本主義との「生の哲学」という共通点に関しては普遍的な「実存」に関わるものとして肯定している一方で、国体に直結したとされる農本主義の特殊性については否定する形を採っている。その為橋川の藤田へのスタンスは、橋川が農本主義について肯定的立場と否定的立場を共存させていることを通じて伺える。

本研究で対象となった戦後の1957 - 59年という時期の「知」は、日本マルクス主義が「正しい科学」であるという認識の強い状況であったと思われるが、橋川は吉本の「転向論」の影響を受けつつも、日本ロマン派に内在する問題を近代そのものの矛盾と捉えるビジョンを持った時期であったと考えられる。このことはこの時期の橋川が、日本においてはマルクス主義が「実存」を含んだ形では定着し得なかった為の人々は理想像を含んだ反「科学」的な日本ロマン派に「実

存」を求める様になったという視座を通じて、日本マルクス主義が賄いきれなかった代替として日本ロマン派を位置付けていることから理解出来る。この際の橋川の特徴としては、「左翼」を「右翼」からイデオロギー的に断絶させて論じるスタンスが主流となった戦後日本のアカデミズムの状況の中で、あえて、日本ロマン派は「左翼」的なものを契機とする変革主体が「実存」を守る為に「右翼」的なものと矛盾しつつも共鳴したものであると主張することで、「右翼」を「左翼」から切り分けられない試みをしているということが挙げられる。さらに橋川はこれらの考えから、日本ロマン派は本質的には「日本主義」でも「帝国主義」でもないことを導こうとしていたことも分かった。

なお普遍性を重視する橋川も、西洋近代をモデルとする丸山も、本質的には「観念」的に日本そのものを語ることから脱し切れていないという特徴がこの時期にはあったことも押さえておく。ある社会状況の影響を受けつつ生まれる、様々な価値観の違いは現代を生きる我々にも、自己を投影させた歴史認識をどの様に扱うべきかという、「実存」に関わる問いを改めて投げかけているものと思われる。

#### 〔参考文献〕

- 赤藤了勇 (2001g). 「著作目録」『橋川文三著作集 10』筑摩書房
- 井口時男 (2011). 「解説 超越者としての戦争」『日本浪漫派批判序説』講談社
- 桶谷秀昭 (1984). 「『日本浪漫派批判序説』について」『思想の科学』50 思想の科学社
- 竹内好 (1948=1980a). 「近代とは何か」『竹内好全集 第四巻』筑摩書房
- 竹内好 (1957=1981a). 「アジアにおける進歩と反動」『竹内好全集 第五巻』筑摩書房
- 竹内好 (1964=1981a). 「日本人のアジア観」『竹内好全集 第五巻』筑摩書房
- 竹内好 (1952=1980b). 「国の独立と理想」『竹内好全集 第六巻』筑摩書房
- 竹内好 (1951=1981b). 「近代主義と民族の問題」『竹内好全集 第七巻』筑摩書房
- 中島岳志 (2011). 「解説 橋川文三と内在的批評」『橋川文三セレクション』岩波書店
- 中野重治 (1952a=1978). 「第二『文学界』・『日本浪漫派』などについて」『中野重治全集 第二十一巻』筑摩書房
- 中野重治 (1952b=1978). 「近代日本文学の背景としての労働者階級の成長」『中野重治全集 第二十一巻』筑摩書房
- 成田龍一, 吉見俊哉 (2002). 『20世紀日本の思想』作品社
- 成田龍一 (2013). 「解説 3 『共同研究 転向』の完結とその後の転向論」『共同研究 転向 6 一戦後編下』平凡社
- 橋川文三 (2000a). 「日本浪漫派批判序説」『橋川文三著作集 1』筑摩書房
- 橋川文三 (2000b). 『橋川文三著作集 2』筑摩書房
- 橋川文三 (2000c). 『橋川文三著作集 3』筑摩書房
- 橋川文三 (1959=2001a). 「昭和十年代の思想」『橋川文三著作集 4』筑摩書房
- 橋川文三 (2001b). 『橋川文三著作集 5』筑摩書房
- 橋川文三 (2001c). 『橋川文三著作集 6』筑摩書房
- 橋川文三 (2001d). 『橋川文三著作集 7』筑摩書房
- 橋川文三 (2001e). 『橋川文三著作集 8』筑摩書房
- 橋川文三 (2001f). 『橋川文三著作集 9』筑摩書房
- 橋川文三 (2001g). 『橋川文三著作集 10』筑摩書房
- 平野敬和 (2006). 「ロマン派体験の思想史」『甲南女子大学研究紀要第42号 文学・文化編』甲南女子大学文学部事務室

- 藤田省三 (1956a=1998). 「天皇制国家の支配原理」『天皇制国家の支配原理』みすず書房
- 藤田省三 (1957b=1998). 「天皇制とファシズム」『天皇制国家の支配原理』みすず書房
- 藤田省三 (1959c=1998). 「天皇制のファシズム化とその論理構造」『天皇制国家の支配原理』みすず書房
- 松本健一 (1984). 「橋川文三論 <歴史> を見つめる人」『思想の科学』50 思想の科学社
- 松本健一 (2000a). 「解題」『橋川文三著作集 1』筑摩書房
- 松本健一 (2000b). 「解題」『橋川文三著作集 2』筑摩書房
- 松本健一 (2001b). 「解題」『橋川文三著作集 5』筑摩書房
- 丸山眞男 (1946=2003a). 「超国家主義の論理と心理」『丸山眞男集 第三巻』岩波書店
- 丸山眞男 (1949=2003b). 「軍国支配者の精神形態」『丸山眞男集 第四巻』岩波書店
- 丸山眞男 (1956=2003c). 「戦争責任論の盲点」『丸山眞男集 第六巻』岩波書店
- 丸山眞男 (1982=2003d). 「竹内日記を読む」『丸山眞男集 第十二巻』岩波書店
- 丸山眞男 (1986=2003d). 「『日本浪漫派批判序説』以前のこと」『丸山眞男集 第十二巻』岩波書店
- 丸山眞男 (1964=2004). 「普遍の意識欠く日本の思想」『丸山眞男集 第十六巻』岩波書店
- 吉見俊哉 (2002). 「一九三〇年代論の系譜と地平」『一九三〇年代のメディアと身体』青弓社
- 吉本隆明 (1958=1969). 「転向論」『戦後日本思想大系 13 戦後文学の思想』筑摩書房

- 1 吉見俊哉と成田龍一は、1930年代には、マルクス主義、モダニズム、ナショナリズムといった要素を基にした変革の主体が模索されたものの、「超国家主義」へ回収されていったと論じている〔成田、吉見 2002: 20 - 24〕。
- 2 本作品は、同人雑誌『同時代』の第四号（1957年3月15日発行）から第九号（1959年6月5日発行）において最終章を除き連載発表され、その後『日本浪漫派批判序説』（1960年2月、未来社刊）に初めて収められた〔松本 2000a: 359 - 360〕。なお本論考のタイトルの表記には「漫」でなく「曼」が使用されている。
- 3 橋川は戦後においても保田が論考「人間の幸福と論理の問題」を通じて、西欧近代の支配を否認する精神として非政治的性格な無抵抗主義と「イロニイとしてのアジア」を主張したり、アメリカやソ連に属する情勢論ではない絶対平和論を主張したり、近代文明以上に高次な精神と道徳の文明の眺望を自覚することを主張したりしていると論じている。
- 4 井口は、「スノビズムとは、他者や異物をすべて表象に還元して内面化してしまう文化のシステムのことである。」と述べている〔井口 2011: 305〕。
- 5 「転向論」において吉本は、「…日本の社会的構造の総体が、近代性と封建制とを矛盾のまま包括する…」〔吉本 1958: 202〕土壤であるにも関わらず、日本のインテリゲンチヤは「…日本近代社会の構造を、総体のウイジョンとしてつかまえそこなった…」〔吉本 1958: 188〕と述べている。
- 6 竹内は論考「近代主義と民族の問題」において、マルクス主義者を含めた近代主義者たちが自らを被害者と規定して、ナショナリズムのウルトラ化を自己の責任外の出来事としたと述べている。そして竹内は、この素朴な民族の心情が権力支配に利用され同化したことに対峙しない心理には、戦争責任の自覚の不足があるとしている〔竹内 1951=1981b: 31 - 37〕。
- 7 橋川は、プロレタリア共産主義運動の本質追求を戦後出発の課題にしたにも拘らず、アンチテーゼとしての日本ロマン派の理解をしていない『近代文学』を批判している〔橋川 2000a: 5〕。
- 8 橋川は仮説として、①日本ロマン派しか体験してない三十代、②日本ロマン派の体験の前に「転向」も体験している四十代、③共産主義・プロレタリア運動から「転向」を経て日本ロマン派に至る体験を持つ五十代、という世代の違いに着目した昭和の精神史の型を提示している。
- 9 「昭和十年代」は、現実に対する認識の在り方そのものが問われた時期である1930年代前後に該当している。
- 10 橋川はこれらのことを踏まえ、大正・昭和の時代状況については、①「郷土喪失」や「根底喪失」

の感情が中間層に浸透していたことや、②第一次大戦前後に始まった独占資本主義の急速な発展・巨大化に伴って、農村を基盤とする中間層の未曾有の解体が約10年間の収斂過程を経てなされたことなどを述べている。また日本ロマン派については、①プロレタリア的インテリゲンチヤの挫折感による、広汎な中間層の失望・抑圧感覚に対応したものであったということや、②1932～34年は社会運動全体が一つのサイクルを完了する時期であったとして、共産党運動の政治的無効と等価であったということを論じている。

- 11 橋川は日本ロマン派の「日本美論」について、「…政治から疎外された革命感情の「美」に向っての後退・噴出であり、デスパレートな飛躍であったと考える。」〔橋川 2000a: 27〕や、「…政治的リアリズムとそのアンチテーゼとしての日本の美意識の問題にまで結びつける必要があるように感じる。」〔橋川 2000a: 27〕と述べている。
- 12 ここで橋川は、丸山真男が1949年に初出した「軍国支配者の精神形態」と、1946年に初出した「超国家主義の精神形態」を引用している。なお丸山はこの橋川の「軍国支配者の精神形態」の解釈について、丸山が意図した軍国支配者の相関図の中に文学者である保田与重郎は想定されていないとして批判している。さらに丸山は、橋川が不決断主義である故に、全共闘の反政治主義的政治行動との共鳴盤があるのではないかと述べている。〔丸山 1986=2003d: 269, 280〕。
- 13 橋川は、日本ファシズムについて日本の土着性に注目した神島二郎の「自然村的秩序の自覚的追及過程」の概念も肯定的に引用している〔橋川 2000a: 15〕。
- 14 マルクス社会をふまえた「市民社会」理論の内部からの独自の発展の紹介としては、①権威主義対自由主義という思想形成の為の基準を設定した「資本主義論争」について、②国内改革とアジア問題解決をパラレルに把握しつつ帝国主義を否定した「東亜新秩序」思想について、さらに、③マルクス主義の追求した「意識」と「存在」とは機能的・組織的に「社会性」と「個人性」の関係作りに関わってくるものであると捉えつつ「自我」の再生をさせた小林秀雄の「社会的自我」が挙げられる〔橋川 1959=2001a〕。
- 15 橋川は「…古典的ロマンティック批判の方法が、初めてそのまま適用されうるまでに成熟した我国のロマン主義が、実は、昭和十年代のそれ（日本ロマン派）であったと私は考えるのである。」〔橋川 2000a: 45〕と述べている。
- 16 橋川は「…ドイツ・ロマン派の極限的な主観性の立場は、その精神的・肉体的破滅の手前で、均しくカトリック教に、『転向』することによって救済され、従ってまた、メッテルニヒ＝カトリック反動の文字通りの走狗となるにおわたが、わが日本ロマン派の場合には、なんらそのようなポジティブな、総合的な体系は存在しなかった…」〔橋川 2000a: 47〕と述べている。
- 17 このことに関する橋川の語りには、保田が空襲の被害を「業火」と観ていたことや、保田が「鬼畜米英」の兵士に「あな面白」と驚嘆したことや、保田が近代兵器の成り立ちが英米的謀略のあらわれであるとしていることや、保田が古事記を抱いてジャングルで屍になることを熱望したことや、若者はその様な保田の影響を受けていた、ことなどがある〔橋川 2000a: 34 - 35〕。
- 18 橋川は、マルクス主義・革命思想の完全な倒錯・変質によって保田の美学と古典の関係から「死の追求」と共に「美の構想」が生まれたということは、日本の政治と美の問題に日本ロマン派と実存主義との相似な関係が深く関わっていたということでもある、と述べている〔橋川 2000a: 48〕。
- 19 この「侵略主義」には、日本ロマン派の現実の言葉でなく、心情の言葉で語られた排外主義・侵略主義の含みがある〔橋川 2000a: 50〕。
- 20 従来の国学思想に見られなかった、「米作文化」のカテゴリによって「アジア」の普遍的理念を国学的にとらえるという発想も持っていることとされる〔橋川 2000a: 71〕。
- 21 人道主義的農本思想として愛郷塾の塾主である橋孝三郎、制度学的農本主義として権藤成卿〔橋川 2000a: 72〕が挙げられている。
- 22 藤田省三の「天皇制とファシズム」『講座 現代思想 V』からの引用とされている。この論文は1957年の初出である。
- 23 古神道の農業理念で、明治以降の「富国強兵政策のための農の尊重」と異なるものとされる〔橋川 2000a: 63〕。
- 24 橋川は、保田与重郎が「唯物論研究会」を批判していると述べている〔橋川 2000a: 63〕。

- 25 橋川は、制度学の観念的論証からの視座であると述べている〔橋川 2000a : 63〕。
- 26 橋川は、日本ロマン派が都市インテリゲンチヤの浮動心理に訴えた文学運動であったのに対し、農本主義思想にはロマンティックな人道主義的情熱による非都会的インテリ層（＝青年将校）への訴えの動きや、制度学者からの守旧層への訴えの動きがあったとも述べている〔橋川 2000a : 62〕。
- 27 丸山は、日本の皇室は政治権力であると同時に宗教権力であった為、日本で政治学や一般国家学が出て来る余地がなかったとしている。また丸山は、日本では宗教が政治から独立していない為、人々の普遍的意識へのコミットが弱いとしている〔丸山 1964=2004 : 63 - 64〕。
- 28 戦後にアジアとの関係で日本近代や日本ファシズムを考察した論者としては竹内好が知られている。竹内は、日本文化は転向文化であり〔竹内 1948=1980a : 163〕、戦前の日本は実質的に国際帝国主義に操られた「ドレイ」であったと述べている〔竹内 1952=1980b : 83〕。また竹内は、敗戦によって明治以降培われていたアジアを主体的に考えて責任を負う姿勢が失われたとし〔竹内 1964=1981a : 118〕、民族的使命感の一貫性を保つべく進歩と反動の評価を逆転させる必要性を説いている〔竹内 1957=1981a : 76 - 77〕。なお丸山真男は竹内について、「すさまじいニヒリズムをくぐった啓蒙者」と呼び、進歩を前提として反動を価値づけていることを評価している〔丸山 1982=2003d : 33〕。

